



地球の経度で45度ごとに配置されている8基のステーションは地球近傍の宇宙都市群の中では最大の居住人口を持つ。いわば地球圏のビジネスセンターである。各ステーションを起点とする恒星間航路は、方面別に各ステーションに振り分けられていて、それぞれの恒星系群を相手にするビジネスの地球側の窓口になっている。そのため、地球の各地域との間のシャトル便の数も多いのである。俺たちは第6ステーションを経由して、日本エリアのハブ宇宙港であるフジスペースポートに向かうことになる。

「やっぱり、こっち側から見る地球はいいですね」

マリナが言う。L2ステーションは地球を挟んで太陽の反対側を地球と同じペースで公転している。そこが軌道の遠心力と、地球、太陽の重力がバランスするラグランジュ点のひとつだからだが、そのため、常に地球の夜の側を見ることになる。つまり、青い地球は決して見るこゝとができないのだ。今、俺たちは地球の昼の側に回り込みつつある。なので、だんだん地球の昼の面、つまり青い地球が見えてくるのである。

「なんか、ほっとするなあ。地球を見ると」

「ケンジ、あんたガラにもなくホームシックにかかってるわけ？」

「あんな、俺は純粹にこの景色が好きなんだよ。人を子供みたいに言うなよな。そういう前こそ、パパが恋しいんじゃないのか？」

「ふん、誰があんな研究バカなのか……。そもそも私が疫病神なんて呼ばれてるのは、あいつのせいなんだからね」

「お前な、親を相手にあいつ呼ばわりかよ」

「当然よ。自業自得なんだから」

しまった、ちよつと触つてはいけない部分にかすってしまったっぽい。たしかに、そういう面では美月が親を恨んでもしかたがないのだが、そこはそつとしておくべきところだ。話題を変えなきゃいかんのだが。

「そういえば、これからお世話になる美月さんの、おばあさまって、どんな方なんですか？」

マリナさん、いいタイミングで持って行ってくれましたね。ナイスです。

「おばあちゃんと言っても、母方のほうで、そんなしょっちゅう会ってる訳じゃないんだけど、私は結構好きよ。上品で優しいし」

「そうですか。お会いするのが楽しみです。あ、そうそう、お土産持ってきたんですよ。お口に合うかどうかかわからないのですが」

「そんな、気を遣わなくてもいいわよ。おじいちゃんと気楽な二人暮らしで暇みたいだし、賑やかなのは嬉しいはずだから」

「どうやら、美月はおばあちゃんっ子だったらしい。ちょっと突っ込みたいところだが、せっかくマリナが話をそらせてくれたのだから、ここはちょっとこらえておこう。」

「なによケンジ、言いたいことがあるなら言いなさいよねっ」

「いやいや、何もないから」

危ない危ない、ちょっと顔に出てしまったみたいだ。気をつけねば。

「ところで、ケンジの家には、ご両親だけなのかな」

「あ、両親と妹の3人だよ」

「へえ、ケンジってお兄ちゃんだったんだ。道理で面倒見がいいわけだね」

「どういう意味だよ」

「そう言う意味だけど？だって、美月の下僕が勤まるくらいだしね」

ケイの奴、また余計なことを。しかし、美月とは違う意味で、うちの妹も……

「そうだ、ケンジの家にも行っていいかな？ ご両親にもご挨拶したいしさ」

「両親に挨拶……って」

「え、いつもお世話になってます……って？ やだなあ、何を想像したのかな。何か期待した？」

「しとらん！」

まったく、こいつは暇があればこうやって、人をおちよくって遊ぶわけで。で、その結果として……

「あんたね、勝手に人の下僕に手を出したら許さないんだからね」

・・・と、こうなるわけだ。

「いやいや、こういうのは本人よりも家族ウケが命だから。美月も、少しおしとやかにし
といたほうがいいんじゃない？」

「あんたね、喧嘩売ってるの？」

「おい、もう止めようぜ」

「ケンジ、あんたいったいどつちの味方なのよ」

「もちろんケイさんの味方よね」

「どつちでもない！どつちもごめん」

そういった後、しまった・・・と思ったのだが、案の定、二人から思い切り睨まれてしまっ
た。どうも俺は、一言多いみたいだ。こいつらに口で勝てるはずがないから、余計な一言は命
取りである。俺だつて修羅場はごめん

「それじゃ私の・・・って、あ、冗談ですよ、もちろん」

突然、マリナが・・・でも冗談だったんですね？マリナさん。俺は悲しいです。だが、赤
くなつて焦っているマリナは、なんだかかわい。とりあえず、マリナの一言で、二人の視線
が俺から逸れてくれたのは助かったのだが。

「そう言えば、ケンジの親父さんって、電子工学が専門だったよね。僕も会ってみたいな」

「ああ。でもあんまり期待しない方がいいぞ。お袋が役に立たないガラクタばかり作つて
るって、いつも怒ってるから」

「そうなんだ。でも、この前、アカデミーのライブラリでケンジの親父さんが書いた論文を
読んだんだけど、すごく興味深い内容だったよ。プロジェクトの人たちも参考にしているみた
いだし」

「へえ、そうなのか。うちの親父がそんな論文書いてたなんて知らなかったな」

「一見地味な研究なんだけど、今、情報研究センターでやってるテーマの多くに関係してる
重要な基礎研究だからね。一度会って、直接話が聞きたいと思つてたのさ」

実際、親父が大学で電子工学の研究をしているのは知っていたが、俺の記憶に残っているの
は、家にころがる用途不明な「発明品」、お袋言うところの「ガラクタ」とか、時々、天体望遠
鏡を持って星を見に連れて行ってくれる親父の姿でしかない。美月の親父さんなんかとは比べ

ものにならないが、それでも多少は世の中の役に立つことをしていたのだったら、悪くはない。でも、いったいどんな研究をやったんだろうな。言われてみると少し気になる。帰ったら、ジョージに便乗して話しても聞いてみるか。いまさら直接聞ける話でもないし……。

そんな話をしている間に、空に見える地球はどんどん大きくなっていく。いつの間にか、ほぼ丸くなって、見慣れた青い星の姿に変わっている。前方に明るく輝く静止軌道ステーションのいくつかが見えてきた。「天使の首飾り」の一番内側のリングである。ジョージが出してきている周囲の船の情報もどんどん増えている。

「だんだん混み合ってきたねえ。ま、今日はナビやってるわけじゃないし、気楽なもんだけどや」

「へえ、いつもは仕事してるみたいない方じゃない？」

「してるよ。ま、ほとんどが機械と鉄砲玉みたいな誰かさんのお守りだけどねえ」

「それ、どういう意味？あ、そうか、ケンジのことね」

いかん。どうも、さつきからこの二人は危なっかしい雰囲気だ。この調子だと先が思いやられる。結局、最後には俺のところには火の粉が降ってくるのは毎度のことだ。美月とケイ、陰悪になっても、なぜか正面衝突にならないかわりに、いつの間にか矛先が俺の方に向かってくるのは納得いかんのだが……。

「皆様、当機はあと10分ほどで第6静止軌道ステーションへの最終アプローチを開始します。アプローチ開始後はシートホルドを作動させますので、お手洗いはお早めにお済ませください。またお荷物は……」

アウトバンド経由のアナウンスだ。もう地球は陸地の影が見えるくらいに大きくなってきた。正面は大西洋だろうか。シャトルはこれから南米北部を横切って太平洋上、西経135度の上空36000Kmにある第6ステーションへ向かう。今の時間、第6ステーションはまだ未明の空にいる。直下の地上がちょうど夜明け頃の到着だろう。もちろん、ステーション自体の時間は8時間タイムゾーンだから、地上の時間とは無関係なのだが。

「第6ステーションは入学式以来ですね。なんだかずいぶん昔のような気がします」

「そうだね。マリナともあの時にはじめて会ったんだから。私たちが遅刻してこっそり入ろうとしたら、ばったり……あはは」

「あんたね、そんなことは思い出さなくていいのよ」

「まあ、その後も俺たちは罰居残りだったしな」

「そういう、ケンジは風邪こじらせて倒れたわよね。まったくお騒がせだったわ」

「そうでした。あの時はびっくりしましたよ。ケンジ君、いきなり倒れるんだから」

「へえ、そんな事があったのか。ケンジが風邪引くなんてね」

「意外」

「どういう意味だ、俺だって風邪くらいひくぞ」

「昔からなんとかは風邪ひかないって言うのにな」

「だから、それどういう意味だ、美月」

「そういう意味よ」

「あんな・・・」

「それだけ元気ってことじゃないですか？」

「うん、そういうことにおこよう」

いつの間にか俺がイジられ役かよ。まあ、確かに俺は風邪なんてめったにひかない。あの時は、たぶんその前の騒動が終わって、ほっとして気が抜けたからだろう。でも、それは美月も同じだ。こいつがピンピンしてたのは、ちよっと腹が立つ。

その間に、シャトルはステーションへの最終アプローチを開始する。前方に明るく光る点だったステーションが、次第にその巨大な姿を見せ始めた。やがて、シャトルはステーションからの誘導磁場に乗って減速し始める。前方にステーション内部の空洞が大きな口をあけている。その内側には無数の光。宇宙港や様々な施設の灯りだ。ここも基本構造はL2と同じだ。出発時は景色を眺める間もなく一瞬で宇宙に放り出されたのだが、到着時は充分に減速するので、ステーションの内部がよく見える。中でも大型船の埠頭やスペースガード基地の眺めは圧巻だ。恒星間航路の大型船や、スペースガードの最新鋭巡航艦は、見ているだけでもわくわくする。

「ここの混雑はL2とは比べものにならないよね」

「そりゃ、地球圏と太陽系内、恒星間の各航路が集中するからね。これだけのトラフィックはさすがにコンピュータに頼らないとさばけないから静止軌道ステーションの航法管制システムのコンピュータは、他のステーションに比べるとかなり高い性能が要求される」

「そういうことは、センターコンピュータ並みなのがあるのか？」

「いや、センターコンピュータとは行う演算が違うから、アーキテクチャはだいぶ違うよ。そうだね、どちらかというとヘラクレス3のコンピュータシステムに近いかな。複数のコンピュータが自律連携して全体を管制するってモデルだからね」

「じゃ、例のプロジェクトが進めば、ここのコンピュータなんかも、もっと性能が上がるってことか」

「正解。処理速度だけじゃなくて、管制処理の効率や柔軟性が大幅に上がると期待されてる

んだ」

「たとえば、緊急事態の時に、各船の航路を瞬時に調整するとかいう処理の効率が大幅に向
上すると思うよ。各船への影響を最小限にして安全を確保するというような制約条件が多いシ
ミュレーションも瞬時にできるようにするから」

「ねえ、そんなコンピュータが故障したらどうなるの？」

「大変なことになるだろうね。だから、何重にもシステムは多重化されているし、万一外部
制御が切れた場合、どのような動きをするべきかという情報は、常時、船のフライトコンピュ
ータに送られているので、事故の可能性はかなり低く抑えられてるんだ」

「故障ならいいけど、たとえば人為的なサボタージュなんか起きた時はどうするんだ？」

「それも、あらかじめシミュレーションされているよ。複数のコンピュータが連携する際に、
互いに異常な動きが無いかチェックしているんだ。一部のコンピュータが人為的に異常な動き
をしても、残ったコンピュータがその影響を最小限に抑えるように動くようになってる。も
ちろん完璧というものはないから、高度なテロなんかの可能性は残るけどね。そこは、そうし
た事態を防ぐようにシステムの警備や機器へのアクセスコントロールなど、人間系で対処する
ための方策が講じられているんだ。それに今研究しているものが実用化されれば、そうした問
題に対しても、より適切に対処できるようになるはずだよ」

「そんなプロジェクトに参加できるなんて、すごいですね」

「うんうん。これで遅刻魔が治ったら無敵なんだけどなあ。残念！」

「あはは・・・」

「そろそろ到着だぞ」

前方に壁から逆さにせり出したシャトルベイの建物とそこから尽きだした着陸デッキが見え
てきた。シャトルは手前で一気に減速すると、ゆっくりとデッキへ滑り込む。ゲートまでは数
分。シャトルを降りると、そこは大勢の人でごったがえしていた。

「おお、すごい人だねえ。やっぱ大都会は違うなあ。これに比べるとL2なんかド田舎だよ
ねー」

「何、田舎者みたいなこと言ってるのよ。恥ずかしいわね」

「でも、久しぶりだよな。こんな人混みは」

「えっと、ここで乗り継ぎに4時間か。ちよつと時間があるね」

「ちよつといいから軽く食事でもしない？」

「そうだな。次のシャトルのゲートは？」

「ターミナル5のC23になってるわよ」

「ここがターミナル2だから、連絡シャトルで移動しないとイケないな。とりあえずターミ

ナル5に言ってから食事にしないか」

「そうだね。そのほうが時間が読めて安心だ」

「どうせなら、連絡シャトルじゃなくて地上に出て車にしない？むこうの地上施設のレストランで食べようよ。地球を見ながら食事したいかも」

「地上でゾーンをまたぐ移動だと結構時間がかからないか？この地上はゾーン2だろ。むこうはゾーン1だし」

「移動には一時間もかからないんじゃない？余裕だと思うけどなあ」

「いいんじゃないかな。まだ時間もあるし。それにゲートのあたりじゃ、あんまりまとまな食事もできなさそうだから」

「しょうがないな。じゃ、上にかかるか。いいかな、みんな」

「いいですよ。ここも久しぶりですから」

「時間つぶしにはなるから、いいんじゃない」

「同意」

「よし、決まりだ。じゃ、とりあえず上で車を拾おう」

俺たちは、昇降シャフトを探して、そこから地上に上がる。宇宙港内の時間はゾーン1で統一されているが、上に出ると時間が8時間戻る。時間帯は未明。そこから一時間弱の移動で、昼のゾーン1というのも、また変な感覚だ。

俺たちはシャトルターミナル前の車寄せで、車を拾って乗り込む。このあたりは、差し渡しが20Kmほどある宇宙都市の中央部だ。ゾーン間の連絡道路は端に近い部分にあるため、かなり余計に走らないといけない。連絡シャトルなら5分で到着するのだが。まあ、それはいまさら言ってもしかたあるまい。

「シャトルターミナル5まで」

行き先を告げると、車は機械的な応答を返してから滑るように走り始めた。宇宙都市の交通システムは全自動である。渋滞もない。車の運転間隔はすべて最適化されていて、乗った時点で到着時間が正確にわかる。今の予測は32分。思ったよりも早く着きそうだ。

「余裕だね。ゆっくり食事ができそうだよ」

高架道路に上がった車は、流れに乗ってスムーズに走っていく。太陽はまだのぼっていない。空には満天の星。東の空が少し明るいのは夜明けが近いからだろう。車はしばらく北に向かって走るとジャンクションで東に折れ、ゾーンをまたぐトンネルに入る。トンネルを抜けると、

そこは昼間のゾーンである。まるで別世界への異次元トンネルを抜けたような感覚だ。車はまたジャンクションから高架に上がって今度は南に向けて走り出す。窓の外は広々としたグリーンベルト。そしてその先には高層ビル群がそびえている。

「やっぱり都会だな、ここは」

「何、田舎者みたいなこと言ってるのよ。東京育ちのくせして」

「あのな。L2と比べての話だろ」

「まあ、たしかにL2はこと比べれば、ド田舎だけどね。地球も見えないし」

「そういう問題か？」

「いやいや、地球が見えるってのは、宇宙都市的にはひとつのステータスでしょ」

「くだらないわね。そんな関係ないじゃない」

「同意。それは単なるノスタルジー」

「でも、お歳を召した方々は地球が懐かしくなるっていいますから、そんな価値観があってもいいんじゃないでしょうか」

「やっぱ老後は地球よね」

「勝手に老け込んでなさいよね。あんたいったい何百歳なのよ」

「まあまあ、価値観は人それぞれだろ。それでいいんじゃないか？」

まったく、油断しているとまたキナ臭いことになりそうだ。この旅行も、ずっとこの調子だと先が思いやられる。最近、とみにケイと美月のつばぜり合いが激しくなっている気がするのだが、リーダーの俺としては、ちよっと困りものだ。いいタイミングでマリナが火消しを手伝ってくれるのが、せめてもの救いだ。

「で、食事はどこにする？」

「シャトルターミナルの地上側にレストラン街があったわよね。まあ、味はあんまり期待できないけど」

「あ、それならいいお店がありますよ。L2にあるお店の同じ系列なんですけど」

「それって、例のお店？」

「そうです。実は各宇宙都市にお店を出してるらしいんですよ。私も最近知ったんですけど」

「なら、そこにしよう。美月も文句ないだろ？」

「ま、地球以外じゃマシンなほうだし、いいんじゃない？」

「素直じゃないねえ。必死にステーキ食べてたのは誰だっけ？」

「うるさいわね。ほっといてよ」

「じゃ、ちよっと予約できるか聞いてみますね」

マリナはコミュニケーターを取り出して店を呼び出す。幸い、席は空いていてすぐに入れそう
だ。

「マリナったら準備がいいねえ。もしかして狙ってた？」

「あ、実は少し……。私も、あのお店は気に入ってるんですよ」

なるほど、そういうことか。でもまあ、あちこち迷わなくていいのは大助かりだ。そもそも、
マリナがいなかったら、どの店にするかで大もめしそうだし。新学期直後のドタバタの後、食
事をやった附属高歴代生徒会御用達のレストラン。とにかく自己主張が強いこのチームの最
大公約数をとれる数少ない、というより今のところ唯一の店の系列店が、ここにあるとは俺も
知らなかった。

まもなく車は市街地のはずれにあるシャトルターミナルに到着する。俺たちはマリナの案内
で、お目当ての店に入り、出発までの間、ちよつと豪華なランチを楽しむことになったのであ
る。